

日本淨土教思想の展開

特に北嶺天台を中心として

龍
安
雄

日本に佛教位来以來淨土教思想の展開をながめるとき、法然上人立教開宗を基矢として、それ以前
の淨土教思想は、所謂高僧の展開時代であり、天台・真言・三論等の諸宗に附帶展開をなし、そ
して鎌倉時代純粹淨土教を生み出す迄は、中国淨土教思想の絶えざる影響の下に育てられたが、そ
の獨特の受容形成と、その時代々々の思想こそが、純粹淨土教を生み出す歴史的必然性を持つてい
た事は言う迄もない。

而し諸宗に附帶展開をなした淨土教思想を考察する事は重要且つ意義ある問題であるが、それは
かなり複雑困難であるので、特にこの稿に於て純粹淨土教念生の母胎と云うべき日本天台を中心と
せる思想展開を大畧に述べて行くであらう。

さすれば、日本天台は如何ように淨土教を受容する事によつて、如何ように展開したかを注意せね
ばならない。

先づ淨土教の母胎となつた天台は特に法華思想を中心として展開した。即ち、「法華」と「念佛
」との一具一体の思想が何れれるのである。

されば天台の所依聖典たる「法華經」に於てすでに淨土教の思想が現れ、「歡迎」、「沐浴」と共に「法華」を説いてゐる。即ち「繫王菩薩本事品」に

若如未滅後五百歲中。若有女人。聞是經典如說修行。於此命終。即往安樂世界阿彌陀佛大菩薩摩訶薩處。生蓮華寶座之上云云。

と説いてゐる。かように日本天台に於ては「法華經」を中心として展開して行くのである。

伝教大師日本天台を開創するや、中国天台の開創智顗の東國形態と異にし、四：密、禪、戒の四宗綜合の特異性が窺われるのである。

されば一宗實踐業として止觀、遠近二業を修せしめられ、その止觀業は中国天台の「摩訶止觀」に就く止觀の四種三昧を修せられたのであつて、四種三昧とは、常行、常坐、常行、半行半坐、非行非坐三昧で共に佛を觀する行法で、この中、常行三昧は「般舟三昧經」に依り九十日を一期として沐浴三十二相を觀想し、而して觀佛三昧即ち、一心三觀を成就せんために、沐浴名号を唱え、身口意三業、唯沐浴を對象とする事をしたき、四種三昧法は中道與相を成就する方便行とされた故、常行三昧法し、天台止觀として行われたのである。思うに、かような實踐が悉く採用されてゐる事は、般舟三昧經が沐浴に關した經典として注意せられて来た事は、中国淨土教思想展開をみるとき目明であらう。

この四種三昧を伝教大師は比叡山に移植し又、慈覺大師は承和五年(839)入唐、五台山に登り法照禪師より五台山念佛三昧法を學んだのである。即ち法照の「淨土五会念佛略法事儀讃」に

釈五会念佛五音救会集會、彼五種音聲從續至念唯念仏法僧更無雜念、念則無念佛不二門也、声則無常为一教也、故終日念佛恒續於眞性終日願生常使於妙理云云。

とあり、單なる林名でなく、理、事、双修の念佛であり、常行三昧が「般舟三昧經」を所依とするに對して、五

念仏三昧は沐浴の一經を中心所依としてゐる。

さ小は慈覺大師が帰朝後叡山に建立した三昧法でなく、五台山念仏三昧法を移し不斷念佛である。かように四宗綜合の日本天台は、止觀本来の常行三昧と五台山念仏三昧とが合流融攝しその間、「法華」と「念佛」とが調和を著しく増大せしめて一大思潮をなすに至つたのであると考えられる。^②しかし五台山念仏三昧もすでに天台由來の思想信仰から取えて「法華」と矛盾するものでなかつた。即ち、惠心僧都の「觀心略要集」に

於阿沐浴三字、可觀空假中三諦。彼所者即空、沐浴即假、隨者即中^③也。とし又、

法華云三身仏法僧三寶。三德、三般若。如此等一切法門、悉攝所沐浴三字。政昭名號、即歸入萬法藏。と云ひ、沐浴皆是凡丈。皆依觀三諦理得三諦之悟。我等問是又丈何不修一門因感一門之果^④と説き、「法華」と「念佛」の一教を教えたのである。

さ小は「法華」と「念佛」の日本天台に展開された淨土教は四種三昧行法の中、特に常行三昧へ沐浴念仏と法華三昧へ法華懺法とが中心になつて修行された事は、何れも懺悔滅罪的な精神が修法の中心課題をなし、こ小等の盛行は自己反省、自己意識の思想が台頭した事に何れも、かような思想が次第に普及する事に依つて鎌倉時代の新文化、純粹淨土教を生じて来る過程を物語つてゐるものと見ねばならぬであらう。かゝる思想信仰が次第に進展する事に依つて、所謂「朝題目夕念仏」、「朝懺法夕例時」となり、後拾遺往生伝巻中に

「法華懺法を行じ、不斷念佛を修す」^⑤

とあり、「法華」と「沐浴念仏」の信仰とは何等矛盾せず同体一異として受容展開されたものであらうか。こ小等は天台を中心とした諸行往生思想展開を物語るものであるが、唯「法華」と「念佛」

のみに依るのでなく、持戒菩提心、誦誦大衆等の盛んであつたか、かゝる事実に接して台頭した惠心僧都の「往生要集」である。さしほ「往生要集」は浄土教思想史上、画期的且又思想展開の上に重大な地位をもっている事は周知の事である。歌麿被土、欣求浄土の觀念が惠心以浄土教思想を明確に色彩づけている。こゝに簡単に惠心僧都を中心とした思想展開を考察して行く事とする。「往生要集」壁頭に於て、

夫往生極樂之教行。彌世未代之目足也。道俗賤。誰不歸者。但觀經教法。其文非一。華理業因。其行惟多。利智精進之人。未爲難。如予頑魯之者。豈敢矣。是故依念仏一門。酌東證論要文。披之修之。易。還易行とし、彌陀華理を難修難道として棄捨し念佛の一門を易行易修（純粹浄土教の易行易修とはその意異なる）とし、欣求浄土を明すと云へども、未だ天台本末の觀念主義立場をとり、方便行としての易行易修の方法をもつて論究したものである。

さしほ「往生要集」に於ては、觀念と共に林念を説き、大文才四正修念佛を明すに於ては、かの印度の世親の「往生論」に説ける五念門を修する事とし、その中心が觀察門に置かれている故、浄土依正二報莊嚴を觀想する事が主なる問題としてゐる。即ち

「初心觀行。不堪深奧」⁽¹⁾とし當に色相觀を修すべき事でありとし。

「此分爲三 一別相觀。二總想觀。三雜略觀。遺意衆應」⁽²⁾の三種を出し、

「若有不堪念相好。或依歸命想。或依引攝想。或依往生想。應一心林念」⁽³⁾と林念を進めているのである。

又大文才十阿答料簡才四に尋常の念相を明し、

「一定業。謂坐禪入定觀佛。二散業。謂行住坐臥。散心念仏。三有相業。謂或觀相好。或念仏名号。

編歌。被土。書求浄土。四無相業。謂雖於念仏。散求浄土。而觀身土。即畢竟空。如幻如夢。即体而

空雖空而有。非有非空。通達此趣二義入才一義。是名無相業。是最上三昧^②として、無相業即ち中道実相をもつて最上としてゐる。思うに才一義としての念仏以下、觀念口祿の念仏に彼磨が設けられてゐるが、沐浴の相好を觀念したり、中道実相を証悟して申す念仏の如きにあつては、正に利智精神の入り業であつて、濁世末代の衆生には到底不可能な業で、彼世法然上人を淨土教に導入した要因ともなつてゐるが、法然上人によつて幾多は正せぬがなかつたのも理の当然と云うべきであらう。又一面「往生要集」以外の著述に於て名号を重んじ、祿名を強調してゐるのが何は出る。されば「觀心略要集」に

向。不修理觀只祿一仏名号入得往生不如何。答亦可得往生也。彼繫念定相之觀。未^③云修理觀。聖教未迎之願未^④云修理觀。聖教未迎之誓。只是至心祿名支名号功德以莫大改所以空彼中三諦。法報忘の三身、仏法僧三宝三德、三般若如此等一切法門悉攝阿沐浴三子改唱其名号即誦八萬法藏持三世仙身也、總祿念沐浴仏冥備此諸功德^⑤。

と云ひ、名号功德莫大であつて祿名散心の念仏によつて往生を得るとするのがある。又「往生要集」に「所言十念雖有多釈然一心十遍祿念。南無阿沐浴仏^⑥とあり、又惠心僧都には、念仏と諸行兩往生思想とがある。されば「往生要集」の總括要行の條に於つては「往生之業念仏爲本^⑦とあり、二十五三昧式」に、「往生行業念仏爲最^⑧と説き、惠心の思想に於ては二面の思想が伺はれ、諸行往生に就いては「往生要集」才九往生諸行の中、才二總括諸行の條に

「諸業行業總而言文不出齊銅成而論之不出大度細門其相」其十三 一者戒法等の施 二者三歸五戒八戒十二戒并多小戒行 三者忍辱 四者精進 五者禪定 六者般若 七者念善提心 八者修行六念 九者誦誦大衆 十者守護仙法十一季頌文母 奉事師長 十二不生橋慢 十三

とあり、かゝる行業を諸行とするのである故、念仏以外の諸行往生も認めていた事は明白である。されば浄土往生の行業としては、理觀、觀念、林名、諸行等の諸行を以つてし、就中念仏を体とし、先とするのであるが、その念仏は純粹淨土教の但信口訣と趣を異にするのは、前述したように念門に明す念仏に重きを置いた故であらう。以上「往生要集」を中心とした思想を述べて来たが、こゝで重要な問題として日本天台教学が前迹門、本門、觀心の四重興廢の範疇⁽⁴⁾に於ては如何に受容せられたかである。而して迹門、本門、觀念の三つ即ち、理觀と華嚴と觀念である。理觀的受容に於ては天台の「觀經疏、慈覺の「寂老土記」、惠心の「觀心略要集」、「正修觀記」、「真如觀」、覺運の「觀心念仏」等であり、華嚴的受容に於ては良豫の「九品往生義」、靜嚴の「極樂遊意」、惠心の「往生要集」等に又觀念的受容に於ては惠心の「觀心略要集」、覺運の「觀心念仏」等に現われている恩恵である。要するにこれ等三つの受容形態より考へるに、日本天台の浄土教に於て導導即寂老土、續導即菩提、生死即涅槃、觀念の念仏、理觀の念仏、觀心無作の念仏、唯心淨土、已心の沐浴と云う思想がある所以のものばかりる受容形態によつて理解出来ようが、この問題については考察する点多々大なるものがあるが統教の都合上消略して置き、要する所、北領天台を中心とする浄土教思想展開は、日本天台の哲學的色彩を帯び、眞の宗教とならなかつたが、鎌倉時代の純粹淨土教発生の基盤であつた事は言うまでもない。即ち平安朝一般の解の仏教より鎌倉時代の行佛教へと展開する役割をした事は意義深い事である。以上日本浄土教思想の展開上、特に北領天台を中心として考察したのであるが、未だ考察すべき点多々あるが、この辺で稿を置く事とする。

(本稿は卒業論文「選釈集成成立への思想史展開」の一部である。)

註

- (一) 大正藏九ノ五四頁
- (二) 望月仙教大群典三七九八頁。碓慈弘著「日本佛教の開展とその基調」上・一四四頁
- (三) 大正藏四六ノ十一頁
- (四) 大正藏十三ノ九〇三頁以下
- (五) 入唐弘法巡礼行記、(日仏全・遊行伝教書一六九頁以下)
- (六) 入唐弘法巡礼行記、(日仏全・遊行伝教書二五二頁)。宋高僧伝(大正藏五〇・八四四頁)
- (七) 大正藏四七ノ四七七頁
- (八) 碓慈弘著「日本佛教の開展とその基調」上・一三五頁
- (九) 日仏全・三一ノ一五七頁
- (十) 日仏全・三一ノ一八〇頁
- (十一) 日仏全・三一ノ一七八頁
- (十二) 日仏全・後拾遺往生伝卷中二四二九
- (十三) 日仏全・三一ノ四頁
- (十四) 日仏全・三一ノ五六頁
- (十五) 日仏全・三一ノ五六頁
- (十六) 日仏全・三一ノ六五頁
- (十七) 日仏全・三一ノ一三二頁
- (十八) 日仏全・三一ノ一八〇頁

(七) 日仙全・三一ノ九九頁

(八) 日仙全・三一ノ九二頁

(九) 日仙全・三一ノ二二〇頁

(一〇) 日仙全・三一ノ一二二—一二三頁

(一) 仙大學教三〇号 (悉谷教授「中世仙教々學の特性」)、發卷弘善「日本佛教の開展」の基調「下ノ一八頁、一九七頁以下

以上

(室員四回生)

平海陸本陳の並びに松土の夏開

五